

## 第6回「大阪府寝屋川市・兵庫県神戸市」

### —杏結核資料館と須磨浦療病院—

結核予防会顧問 島尾 忠男

今回4月5日からの関西行きでは、まず大阪府寝屋川市にある杏結核資料館を訪ねた。この記念館は医学史、ことに明治以降の結核の歴史に強い関心を持ち、多くの資料を収集された寝屋川市の小松病院理事長の小松良夫先生が、集められた資料を公開展示するために建設し、平成13年9月に開館した施設である。



杏資料館の展示室

小松先生は結核の歴史に興味を持たれ、資料が比較的によく整備されている結核研究所の図書室をしばしば利用されていた。歴代の図書室の司書の職員からその目的を伺い、相談を受け、その内に直接お手紙を差し上げ、本を頂いてお礼と感想文を差し上げるという形での交流が頻繁にあった。筆者が、開館に際し、明治以来結核の流行で失われた多くの貴重な命に捧げる意味で「鎮魂」という字と、御霊に捧げる決意を書くように依頼され、悪戦苦闘して書かせていただいた色紙と拙文を館の入口に掲げていただいているご縁である。

しかし、純粋に民間の立場でこのような展示館を維持するのは容易ではない。小松先生が平成14年に亡くなられた後、ご遺族は先生のご遺志を体して運営を続けてこられたが、病院の拡張計画とともに、この資料館をどうするかが話題になった折に、関西で同じ医学史研究のお仲間である京大名誉教授泉孝英先生が、本会のアーカイブ事業のをご存知で、同じ呼吸器学会のお仲間である肥後十字病院工藤翔二院長に、資料を本会のアーカイブにお預かりすることが可能か否か

とのお話があり、お話を詰めるための今回の訪問であった。同行は泉先生の他に、当方から工藤院長、竹下総務部長、菊地総務課長と島尾の4名であった。

小松先生の奥様、ご子息や小松病院の理事長にお迎えいただき、当方の結核アーカイブ設立の趣旨を説明し、もし資料をお預かりすることをお許しいただけるなら、清瀬の結研に資料を運んだ上で整理し、保管したい旨を申し上げ、ご了解をいただいた。資料の中には、なんと痰壺条例で有名になった痰壺も保管されており、御本の中には結核に罹患した作家の全集もあり、結研の図書室とは異なった視点で収集されたものも多いような印象であった。小松先生のご遺族の遺志を活かした展示や資料庫にしたい思いであり、仲介の労をとられた京大の泉名誉教授に深甚な謝意を表したい。

翌6日には竹下部長と筆者が、先ず日本最初の結核療養所といわれている須磨浦療病院の跡を、次いで、大阪市、東京市に続いて、第3番目の公的な療養所として建設された神戸市立療養所の跡を訪ねた。

明治22年に須磨浦療病院が設立される2年前の明治20年に、鎌倉海浜院が設立されているが、翌年ホテルに転向しているため、本格的な日本の最初の結核サナトリウムは須磨浦療病院とあってよいであろう。開設者は鶴崎平三郎博士で、湘南と同様、景勝の気候温暖な海浜が建設地として選ばれている。入院料はかなり高額で、庶民にとっては高嶺の花であったことは湘南地方のサナトリウムと同様である。療病院のあった所には、現在も須磨浦病院があり、鶴崎先生のご子孫が院長をしておられるが、結核は全く扱ってはもらえないとのことであった。

須磨公園駅から山陽電鉄で板宿まで戻り、地下鉄で2駅目の名谷で下車、車で数分の国立神戸医療センターが、旧神戸市立療養所跡に建てられた施設である。新興住宅地帯の真ん中にある立派な施設であるが、結核は全く扱っていない。現役の職員で古い結核療養所時代を知っている方も全く残っていない。当地は須磨駅から北西に4キロの山上にあり、以前の市立療養所時代は地名をとって多井畑療養所と呼ばれていたようであるが、療養所以外には何もない情景が脳裏に浮かんだ。わずか数十年の間の変転の夢である。

## —杏資料館について—

結核予防会総務部長 竹下 隆夫



写真のように、杏資料館は2階建てで、2階が医療関係者や市民に公開された展示室になっており、所蔵されている書物だけで約1万冊を数える。そして、展示室の構成は、「19世紀の結核」に始まり、「明治と結核」「大正と結核」「昭和と結核（戦前）」「昭和と結核（戦中・戦後）」「化学療法」「結核とは」「日本の結核、大阪の結核」という流れでまとめられている。

書籍以外のものの中に、写真のような結核紙芝居「裏町の太陽」があったので紹介しておきたい。ストーリーは、父親のいない一家4人の生計を母とともに支える長男の少年が勤め先の工場での健康診断で結核に罹患していることを告げられるが、母に言えずに症状が徐々に悪化していく。そこに弟を結核で失った無念さを抱いた若い保健師が工場から派遣されてくる。彼女の尽力で少年は療養所に入所、適切な治療を受け、10カ月



結核紙芝居「裏町の太陽」

の養生後に回復・退院し、工場への復帰もでき、明るく強く日本の未来を担う決意をするというもので、タイトルはこのヒロイン役の保健師を指しており、結核を予防するポイントなどが随所に散りばめられている。

さて、1923（大正12）年生まれの故小松良夫先生は、旧制中学の3年生のとき親友を結核で失い、そのあとの1937（昭和12）年に自らも結核に罹患して1年休学したという。東大附属医専を卒業して1944（昭和19）年、陸軍軍医となった小松先生は満州へ従軍し、敗戦後シベリアに抑留され1949（昭和24）年に復員された。復員後、長野北信病院や奈良市吉田病院で結核臨床に携わり、その頃から結核史を学び、1988（昭和63）年に大阪府寝屋川市で小松病院を開業された。

2001（平成13）年9月の杏資料館の開館にあたって、故小松良夫先生は次のように言っている。〈当館では、日本人と深い関わりのある結核の資料を単に医学書だけではなくて、患者がじかに接して日々の生活の糧とした「療養書」「官庁からの指導書」「ピラ」等日常接する文書も集め、また婦人雑誌の療養記事等、療養する患者の目線で結核の歴史を見直してみた。ふと足をとめて徳富蘆花の『不如帰』（ほととぎす）を読むことも大事ではあるまいか。結核は社会病なのだから〉と。

## 旧須磨浦療病院と旧国立神戸療養所について

須磨浦病院（旧須磨浦療病院）は、瀬戸内海に面した須磨浦公園の上の高台にあり、「源平史蹟・戦の濱」という石碑が立つ一の谷の決戦場跡に程近い急峻な坂の途中に建てられていた。『平家物語』には、義経が「心して下れば馬を損なうことはない。皆の者、駆け下りよ」と言うや先陣となって駆け下ったとあるが、病院はとて馬で駆け下りることを想定できない急峻な崖の中腹に位置していた。

また、病院の背後には初代院長の鶴崎平三郎が建てた、初期の頃を代表するアールヌーボーの邸宅（野口孫一の設計）を望むことができた。鶴崎平三郎は、東大医学部を卒業後、兵庫県立姫路病院の院長を経て、明治22年にこの結核療養所を創立（因みに、山陽線の開通は翌23年）し、大正7年まで院長の職にあった。その間、有栖川宮威仁親王の主治医や初代兵庫県医師会会長を務め、株式会社神戸衛生実験所（現ビオフェルミン製薬）も創立している。

『須磨浦療病院一瞥』の中には、この地が「気候最も温和の区にして」「冬期は温暖にして夏時は冷涼なり」「四季昼夜ともに急変なくして、病者殊に呼吸器

患者の四時療養に適す」と表現されているが、後日、正岡子規が療養していた須磨保養院は須磨浦療病院の西隣に位置していた。

一方、旧国立神戸療養所は、大正7年創立の神戸市立屯田療養所を伝統的母体として、昭和16年にこれを統合して現在の地に神戸市立多井畑療養所として開設された。この療養所は白亜の鉄筋コンクリート4階建ての立派な建物で、大阪市立刀根山療養所（現国立病院機構刀根山病院）と並ぶ近代的な療養所の代表と称されたという。国立神戸療養所は昭和22年に国に移管（厚生省が運営）されて以降の名称で、昭和56年療養所から総合病院に転換し、平成16年国立病院の独立行政法人化に伴い神戸医療センターと名称変更された。

須磨駅からは遠かったであろうが、この療養所も舞子の海岸を眺め、遠く淡路島を望む山上に建築され、風光明媚で傷心の身を療養する人々には好適の地であったと言われている。しかし、須磨浦病院も神戸医療センターも現在では結核患者を扱っていないことが残念なことであった。

（竹下 隆夫）



現在の須磨浦病院と  
鶴崎平三郎が建てたアールヌーボーの邸宅



かつての須磨浦療病院（正面）